

とことん語る 福島事故と原子力の明日

—学生と原子力OBの往復書簡—

「第4章 核燃料サイクルは本当に必要か？」と

「第5章 廃炉と放射性廃棄物を考える」の見どころ

2012/3/24

「とことん語る 福島事故と原子力の明日」は福島事故の1年後に出版した。事故後の1年間は、その前から続けてきた往復書簡を白紙にもどし、事故で提起された学生諸君の関心や不安など様々な疑問や課題に取り組むこととなった。その結果がこの出版である

出版から更に1年有余、私がとりまとめを担当した第4章と第5章について、改めてこの出版の見どころを紹介したい。

第4章は「核燃料サイクルは本当に必要か？」である。事故後再稼働や脱原発問題がにぎやかとなり、依然として話題が絶えない。そのなかで、脱原発を主張する方々も、いざなくしたい原発ではあるがすでに存在する使用済燃料をどうするかは避けられないことは認識しているようだ。昨年のエネルギー環境会議の方針決定では核燃料サイクルは継続することになった。地元青森県や国外からの意見も踏まえての決定だったようである。

第4章では日本にとって必要との主旨でその理由や方式、課題、対応策等を説明した。使用済核燃料を資源として再利用する核燃料サイクルの意義は失われておらず、依然として現在でも参考にさせていただける内容である。巷間で懸念されるような危険性がないことはもとより、中長期的にみれば高速炉も決して否定されるものではない。日本はもとより世界の将来にとっても期待されていることを読み取っていただきたい。

第5章は「廃炉と放射性廃棄物を考える」である。この問題は福島地区の復旧、復興に欠かせない、新鮮な問題である。「トイレなきマンション」なんて言って済ませる問題ではない。原子力発電内の低レベル廃棄物については既に処分が始まっている。高レベル廃棄物の処分地はまだ決まっておらず、様々に報道されているが、一部にはすでに進行している国もある。高レベル廃棄物の性情や管理の理念を理解していただければ幸いである。解体にともなう廃棄物についても過去の事例や考え方を示した。

この分野では福島地域ならびに発電所内の除染や放射性物質の除去にともなう廃棄物など、地域ならびに発電所の修理、復旧、復興の進展にともない、引き続き新たな課題がでてくるであろう。この章では触れることができなかった課題もあるが、基本的な考え方は参考にさせていただけるものと思う。

石井正則記